

【O4】「オルフ音楽教育の原点を探る—『オルフ・シュールヴェルク』全5巻の特徴と実践」

【講師】佐藤 恩実

【要旨】

オルフ音楽教育は1954年に初めて日本に紹介され、現在ではペントニックやわらべ歌を用いた即興活動などが幼児教育の現場で実践されています。また、音楽療法の分野では「オルフ・ムジーク・セラピー」が広く知られており、療法士の先生方もオルフ楽器を活用する機会が多くあると思います。これらの「オルフ・アプローチ」と呼ばれる手法の多くは、オルフ没後にザルツブルクのオルフ研究所で盛んに実践され、1980年代に留学した研究者たちが日本に持ち帰ったものです。特に1990年代以降、それらが広く紹介されたことで、「オルフと言えば自由な即興活動」というイメージが定着しました。しかし、カール・オルフ自身が提唱した教育理念は、それとは少し異なります。

オルフの音楽教育は、1920年代にダンス教育のための音楽教育として始まりました。彼が音楽を指導していた「ギンター学校」では、リズムと身体の動きを重視し、音楽と言葉、動きを統合した「エレメンターレ・ムジーク(Elementare Musik)」の考え方が形づくられました。戦後、オルフは子ども向けのラジオ教育番組の制作を依頼され、それを機にダンサーのための音楽教育から、子どものための音楽教育へと発展していきます。このラジオ番組は大きな反響を呼び、5年間にわたり続けられました。そして、その放送内容をまとめたものが、オルフの教育理念を具体化した全5巻の楽譜集『オルフ・シュールヴェルク(Orff-Schulwerk)』です。『オルフ・シュールヴェルク』では、ダンス活動も重要な要素とされています。ここで扱われるダンスは、コンテンポラリーの自由な動きではなく、拍節的で伝統的なステップを活かしたものです。具体的には、ポルカ、ドレーアー、シュープラッターといった民俗舞踊や、ブランルなどのルネサンス舞曲が取り入れられており、最終的にはシャコンヌ(バロック舞曲)の創作へと発展していきます。

本講座では、『オルフ・シュールヴェルク』各巻の特徴を整理し、オルフ楽器の魅力と有効な活用法に迫りたいと思います。また、音楽活動だけではなく、簡単で楽しいダンス活動の例も実演や映像を交えてご紹介します。本講座を通じて、オルフの音楽教育の原点を振り返り、彼の本来の理念を整理することで、音楽療法に携わる方々が今後の活動のヒントにしていただけるような視点を提供できればと思います。

【プロフィール】

武蔵野音楽大学声楽科卒業。同大学院修士課程(音楽教育専攻)修了。曹洞宗愛知専門尼僧堂にて安居修行。筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科(学校教育学専攻)研究生、私立高校、短期大学等の講師を経て、武蔵野音楽大学大学院博士後期課程(音楽教育専攻)を修了し、学位:博士(音楽)を取得。現在は龍門寺副住職、国際音楽療法専門学院および武蔵野音楽大学非常勤講師(「オルフの音楽教育Ⅰ・Ⅱ」等の講座を担当)。